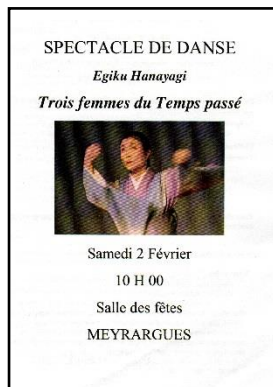


①JapanMANIA 公演

さようならメラルグ、天空からマルセイユを見下ろしながらそっとつぶやいた。パリを飛び立つ時の続く街並みとは全く違い、マルセイユを過ぎてからは延々と雪に覆われた山々が続く。その自然の中に点在する町の一つがメラルグだ。マルセイユから車で1時間ほどの南仏の小さな町メラルグでのフェスティバル JapanMANIA のオープニング公演とワークショップを終えた帰りである。メラルグは人口3000人、町と



オープニング公演
プログラム

いうよりも丘の上にお城をいただいた美しい村という感じだ。南仏の黄色い屋根の家が建ち並ぶ一角に、真っ赤な柱と窓枠に囲まれたハイセンスのかわいらしい文化施設メディアテックと劇場

がある。そこで開催されるのが日本文化を体験するワークショップを中心としたフェスティバル JapanMANIA だ。決して派手で熱狂的ではないが、人々がいつの間にかスーッと集まってきて、きらきらと目を輝かせて学ぶ日本舞踊、生け花、習字、折り紙、茶道、剣道、紙芝居、漫画、料理。こんなところで、日本文化に興味を持ち、憧れの思いで学ぶ人たちがいることに感動する。

昨年の11月に突然飛び込んできたメールは、2年前から日本の素晴らしい文化とその芸術を提示するフェスティバル JapanMANIA を開いている、そこで2018年のアヴィニョン公演「古の三人の女達」をやってくれないか、というメラルグ市のプロデューサー、ゼリアからのものだった。メラルグ市の JapanMANIA の主催者たちは、とても田舎暮らしとは思えないセンスと教養にあふれ、展示する図書もどこかしらデザイン性にあふれている。エクサンプロバンスやマルセイユから招いた日本人講師陣も相当な腕の持ち主達だ。

しーんと静まり返った人気のない小雨降る中世の街並みとモダンな建物のフェスティバル会場の熱気とはどこかそぐわない。しかし一歩メディアテックに入ると日本の文化を学ぼうとしている人々であふれている。フランスは廃れ逝く日本文化の救世主かもしれない。それにしても海外の人々でもすぐに馴染める柔軟な、簡素に見えて実は奥が深い、なんという魅力的な文化を私たち日本人は育んできたのだろう。



メラルグ市長さんから感謝の印としてメラルグの歴史本を頂く。奥左はプロデューサーのゼリア、右は後援のマルセイユ総領事の武田氏



習字のワークショップ

②黒井 治 氏からのメール

日本の伝統技法を学ぶパリ国立コンセルヴァトワール(音楽、舞踊高等学院)の生徒たち

ここ数年アヴィニョン・フェスティバル・オブ参加公演の終了後パリに寄り、黒井治先生にアトリエ公演を開催して頂き、その後、先生と日仏のダンスについて延々とおしゃべりをするのが慣わしになっている。黒井先生から今回の渡仏直前に以下のメールが飛び込んできた。先生は在仏 40 年、役者、演出、ダンス…等々あらゆるものをこなす舞台芸術家だ。最近では全日本洋舞協会会長も勤めておられる。

以下、黒井氏からのメール

「さて昨年お話ししたパリ国立コンセルヴァトワール(音楽、舞踊高等学院)に於ける私のマスタークラスの授業が、先週無事に終了しました。最終日に簡単な発表会をしましたところ、他のクラスの生徒だけでなく、教師陣 8 名も見学に来てくれました。中には、元オペラ座のエトワールも二人いてとても光栄でした。能楽を中心に動きを切り詰めた、若しくは動かないで内面的に表現することを学んで貰いました。コンテンポラリーダンスのセクションの最終学年で生徒の半数は既にプロのカンパニーでのポストが決まっているくらいレベルの高いダンサー達です。

衛菊さんから寄贈して頂いた扇や浴衣が大変役に立ちました。ありがとうございました。」



「今朝、偶然発見したマスタークラスの生徒の一人が FB(Facebook)に写真と共に投稿した文章です。『偉大なる黒井 治の指導による強度で、密度の高い、豊かなマスタークラスが終了しました。もっともっとずっと学んで行きたい分野です。大きなショックを受けました。』

教師にとってこんなに嬉しいコメントはありません。涙が出てきそうです。」